

教育委員会だより

令和5年12月21日号 多治見市教育委員会 教育総務課

くめざす子ども像
お互いを尊重し、
主体的に学び、
挑戦する多治見の子

多治見をもっといい街に！ ～市長への提言～

11月29日（水）に、北陵中学校で『高木市長と中学3年生が語る会』が行われました。社会科（公民）で地方自治について学び、発展的な学習として「多治見市をさらによりよい街にするにはどうしたらよいか」をテーマに市長への提言を行いました。「企業内保育の設置」「オリベストリート改造計画」「喜多緑地にスポーツ広場を」「地場産物を生かしたふるさと納税の活性化」と、生徒たちは知恵を絞ってまとめ上げた提言を発表しました。市長からは、提言一つ一つに対して丁寧なコメントが返されました。3年後には選挙権を得る中学生。将来、当事者意識をもって地方自治に参画する姿勢が培われる学びの機会となりました。



みんなが伸びる・みんなと伸びる

～インクルーシブ教育推進委員会②～

12月8日（金）に、本年度第2回のインクルーシブ教育推進委員会を開催しました。事務局からは、第6期の『インクルーシブ教育推進たじみプラン』に基づく取組を報告しました。その後、兵庫教育大学 宇野宏幸 教授を委員長とする14名の委員の皆様から、基本施策の1から5についてご意見をいただきました。

中心的な話題は、施策5『一貫した支援の取組み』に関する内容でした。各委員からは、障害のある子の就学や就労について活発な発言がありました。会のまとめとして宇野委員長から「インクルーシブ教育に対する教職員の温度差がある。学齢期・学校教育全体をインクルーシブ教育のフィルターで見直したい。協議内容を教育委員会が戦略的に進めていくことが重要。障がいのある子の笑顔が地域で輝くような多治見市にしたい。そのために、先生が抱え込まなくてよいシステムを構築すること、インクルーシブ教育でこそ個別最適な学びを重視して子供や保護者が選択できることを大切にすること。」というご示唆をいただきました。

スペシャルな“しごと塾” ～将来マナビジョン！～

12月9日（土）、セラミックパーク MINO を会場に『職業体験・将来マナビジョン！』が開催されました。例年、教育研究所が多治見ロータリークラブとの共催で『多治見ふるさとしごと塾』を実施しています。今回は、多治見 RC の目玉事業として大々的に開催されることになりました。会場内には40以上の職業体験ブースが開設され、約450人の小学生参加者と中高生ボランティアが集まりました。子供たちは、目移りしてしまうほど多種多様な体験ブースから興味のある職業を選び、“しごと”をすることで専用通貨「うながっぱ」を得たり、別のブースで「うながっぱ」を使ったりしながら小さな社会を肌で感じていました。

ある参加者（小5）の感想を紹介します。「今回の土曜学習では、たくさんの人たちがいろいろ教えてくれてとても良かったです。専門の人が教えてくれたので分かりやすかったし、あっちもこっちもやってみたくまりました。こんな体験を考えてくれた人や関わってくれた人に「ありがとうございました。」と言いたいです。たくさん体験できて、これからも何にでもチャレンジしていこうという気持ちになりました。」



子供たちが目を輝かせて活動する様子から、働くということをより身近に感じ、夢や憧れが膨らんだ素敵な時間になったと感じました。また、子供たちのためにこんな催しを提供できる大人が多治見にいるという頼もしさを感じていました。

副教育長のひとりごと「のど元過ぎれば…？」

年末に近づくにつれ、風の冷たさを一層強く感じるようになってきました。学校では、インフルエンザが大流行しており、毎日のように学級閉鎖等の報告が届きます。しかも、コロナ禍前よりはるかに早い10月から…。思い起こせばコロナ禍の3年間、インフルエンザに罹患する子供や教職員はほとんどいませんでした。マスク着用・手指消毒・こまめな換気・健康観察の徹底など、コロナ対策として行ってきたことが、インフルエンザを抑制してきたとも言われています。

コロナ5類移行からマスク着用も“個人の判断”となっていますが、適切に判断する力は定着しなかったのでしょうか？「のど元過ぎれば…」となっていないことを願うとともに、今一度“個人の判断”の重要性を再認識したいものです。